

最初に見たのはScienceの記事でした。「表情 — 恐怖とか — は思ってるほど普遍的じゃないかもしれない」というタイトルの上に、目のクリッとした女の子が、その目をさらに大きく見開いて、口をあぐりと開けている表情をアップで捉えた写真がなんとも可愛らしく、印象的でした。

ポールと言えばエクマンというのは、Zajoncが読めることの次くらいに心理学者にとって大事な知識です。そのエクマン先生の代表的な仕事は、表情の普遍性、すなわち「幸福」「怒り」「悲しみ」「驚き」「恐怖」「嫌悪」という基本6情動にかかわる表情は、どんな文化圏でも共有されているという話です。エクマン先生、パプアニューギニアの、西欧文化との接触がほとんどない人々のところまで出かけて「悲しい時の顔はどれ？」って尋ねる実験やっていますから、説得力が違います (Ekman & Friesen, 1971)。実はこれの前に大学生を対象に普遍性を検討した論文があるのですが、どうもメタメタに批判されたっぽいんですね。論文の端々から「そんなに嘘だっつーんなら、パプアニューギニアでやってやるよ！ 文句あつか！」という著者の気迫が伝わってきて、「直に読んでみたい心理学古典」の一つとしてお勧めのものとなっています。

その超絶有名な基本6情動研究に、それも因縁のパプアニューギニアを舞台にケンカ売ってるのがクリヴェッリさんら4名の人類学者と心理学者からなるチームです (Crivelli et al., 2016)。もっとも、読むとホンワカする論文です。研究チームの面々が、現地社会にどっぷり浸かってる様子がシミジミ伝わってくるのです。例えば著者の一人は現地家族の養子になっている。もちろん現地の言葉をマスターして自分で実験している。学校の生徒たちが実験に参加しているのですが、実験場所は校長室だということですから、相当仲良しです。

肝心の結果ですが、注目すべきは“gaspings”の表情。冒頭に紹介した女の子の、目を見開

き、口をあぐりと開けて息を飲んだ顔。あれです。研究に参加したTro브리андの少年少女たちの75%が、この「驚き」の表情を見て、「威嚇するときの顔」だと言ったのです。これには驚いたと論文にも書かれています。

なるほど。表情はそこまで普遍的じゃないのかも。パプアニューギニアまで行けばね。一読して最初はそう思ったのです。でも、ふと気づいてしまったのです。これって日本でもやらない？ いわゆる「どこみとんじゃわれ」という表情です<sup>注</sup>。目を大きく見開き、眉根を持ち上げ、怖いお兄さんがよくやる(?)、あの表情。まさにあれじゃないか？

気がついてしまうと、当初は読み飛ばしていた部分が気になってくる。“gaspings”が威嚇に使われることはアイブル=アイベスフェルトも指摘していて、そういう場合は基本的に至近距離だ、なんて書いてあるんです。つまりですよ、顔をぐいっと近づけて「どこみとんじゃわれ」とやる。ああ怖い。でもそれ、知ってる。

いやはや。当初のホンワカした読後感はどこへやら。だって、このTro브리андでは、人々が互いに「どこみとんじゃわれ」とやってるかもしれないんですよ。論文執筆中の著者らがどんな顔して、それがどんな意味だったのか想像しても怖い。Science記事の女の子の表情も違って見えてきます。皆さんも「驚き」で画像検索して、出てきた顔に「どこみとんじゃわれ」と吹き出しつけてみてください。違った世界が見えますよ。

注：表現は尼崎出身の友人からいただきました。尼崎がどんな土地なのかは寡聞にして知りません。



## Profile — 平石 界

東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学、京都大学、安田女子大学を経て、2015年4月より現職。博士(学術)。専門は進化心理学。